

学生諸君が自分を磨く、 就職力の高い大学をめざす

滋賀大学長 成瀬 龍夫



大学は、学生諸君が自分の潜在的な価値を認識し、それらをさらに磨いて成長しようとする場である。私は、そうした観点から、学生諸君、とくに新生入生に対して入学式などで「原石を磨いて宝石に」と呼びかけている。

学生諸君にぜひ念頭に置いてもらいたいのは「自分を磨く」ということの意味である。磨くという言葉には、「努力して上達する」という意味と「輝かす」という意味がある。どんな人にもその人ならではの個性と才能が備わっているが、その人の固有価値は若い時期にはまだ潜在的である。錬磨することによって次第に顕在化し、輝きを増す。それは、いわば宝石とその原石のような関係で、どんなに美しい宝石ももとは石ころと変わらなかった。それが磨かれて玉になる。

おおいに自分を磨いて輝く存在になってほしい。大学の役割はそれをサポートすることである。滋賀大学では優れた教授陣、先端的な理論と実践を採り入れた体系的なカリキュラム、少人数教育、さらに緑豊かで落ち着いたキャンパスが、皆さんの人間的成長を確実に後押しすることを約束する。

ところで、自分を錬磨しても、社会がその成果を正当に評価し受け入れてくれなければ、努力は徒労に終わるかもしれない（実際にはそんなことはない。努力は必ず報われる）。学生諸君は、就職活動でしばしばそうした問題に直面する。しかし、そこで、問われるのは、個々人の問題もあるが、実はそれ以上に個々の大学に対する社会的評価がどうかという問題がある。大学に対する評価の高さがその大学の就職力の高さということになり、逆に就職力の高い大学は大学に対する社会的評価も高いという関係がある。

良し悪しは別にして上述のような関係があるので、大学志願者にとって、自分の入学したい大学を選ぼうとするとき一番気になるのはその大学の就職力である。大学の選択が就職という自分の人生の決定的な選択に直結してくるので、誰しも入学を希望する大学の就職力がどうなっているかに無関心ではおられない。逆に、そうした関係があるから、就職に有利な大学を選ぼうとするということにもなる。

さて、滋賀大学はその点どうであろうか。実は就職力の高さは本学のおおいに誇れるところである。本学は一貫して高い就職力、すなわち卒業生の就職状況がきわめて良好な状態が続いてきた。教育学部は最近、「教員就職に強い大学」、就職率（85%）が全国第3位として雑誌（AERA2004.8.16-23）に取り上げられた。経済学部は、「彦根高商」の名声が今日に至るまで続いており、かつては卒業生の6割以上が株式上場企業に就職していた。近年では就職先は多様化しているが、就職状況が良いことは基本的に変わらない。

就職力が高いのは、すぐれた人材を社会に輩出していることでもある。

教育学部は明治8年の滋賀師範学校創立以来130年、経済学部は大正11年の彦根高等商業学校創立以来80年という永い歴史とすぐれた伝統を有している。教育学部は大量の学校教員を養成して地域社会に送り出してきた。滋賀県における明治以来の教員養成の歴史は滋賀師範、滋賀大教育学部の歴史であるといっても過言ではない。また経済学部は、近江商人を生み出した土地柄をふまえ、戦前から教育理念として「士魂商才」（武士のような教養と商人のような経済的才覚をもつ、という意味。福沢諭吉が提唱した言葉）を掲げ、国内はもとより世界各地で活躍する企業人を大量に育成して世に送り出してきた。

学生諸君が自分を磨く大学、磨いた成果が社会の評価に結びつく就職力の高い大学、私たちがめざしているのはこうした大学である。